

2サムエル記 24 章 18-25 節 「犠牲を伴う捧げ物」

1A 頼られない神

1B 仕えられる必要のない方

2B 支えられる必要のない方

2A 主の圧倒的なすばらしさ

1B 感謝

2B 愛の表れ

3B 決意

3A 捧げる物

1B 砕かれた魂

2B 所有物

1C 時間

2C タラント

3C 財産

4C 言葉

4A 犠牲の必要性

1B 愛の本質

2B 神との交わり

3B 神の恵み

本文

ついにサムエル記の学びが終わりを迎えます。午後礼拝では、22章から24章までを学びます。列王記にも死ぬ直前のダビデの姿が出てきますが、列王記はあくまでもその子ソロモンが王となることが中心です。ですから今回で、ダビデの生涯の総まとめになります。私はダビデが大好きです。実に、ダビデという名前は「愛された者」という意味です。彼の最後の行動を見たいと思います。そこに彼の生き方の根底に流れていた姿勢を見ることができます。サムエル記第二 24 章 18 節から 25 節です。

18 その日、ガドはダビデのところに来て、彼に言った。「エブス人アラウナの打ち場に行って、主のために祭壇を築きなさい。」19 そこでダビデは、ガドのことばのとおり、主が命じられたとおりに、上って行った。20 アラウナが見おろすと、王とその家来たちが自分のほうに進んで来るのが見えた。それで、アラウナは出て来て、地にひれ伏して、王に礼をした。21 アラウナは言った。「なぜ、王さまは、このしもべのところにおいでになるのですか。」そこでダビデは言った。「あなたの打ち場を買って、主のために祭壇を建てるためです。神罰が民に及ばないようにするためです。」22 アラウナはダビデに言った。「王さま。お気に召す物を取って、おさげください。ご覧ください。ここに全焼のいけにえのための牛がいます。たきぎにできる打穀機や牛の用具もあります。」

23 王さま。このアラウナはすべてを王に差し上げます。」アラウナはさらに王に言った。「あなたの神、主が、あなたのささげ物を受け入れてくださいますように。」24 しかし王はアラウナに言った。「いいえ、私はどうしても、代金を払って、あなたから買いたいのです。費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません。」そしてダビデは、打ち場と牛とを銀五十シェケルで買った。25 こうしてダビデは、そこに主のために祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげた。主が、この国の祈りに心を動かされたので、神罰はイスラエルに及ばないようになった。

今読んだ所は、列王記第一を読み進めますと、ソロモンが神殿を建てる場所になります。この時から神殿が、バビロンによって滅ぼされたものの、全く同じ所に再建して、そしてローマによって滅ぼされて、今は岩のドームが立っているところであります。イスラム教徒でさえ、神殿の建っていた岩は神聖だと認めています。そして将来、再臨のイエスが来られるときは、そこに新しく神殿を建てると約束しておられます。永遠の将来にまでご自分が住むと定められたのが、このエブス人アラウナの打ち場であり、今は神殿の丘と呼ばれているところです。

そのきっかけになったのが、ダビデが全イスラエルの人口調査をさせるという過ちでした。それは主の御心にそぐわないことであることを、ダビデは後で悟りました。そのことで主は、イスラエルの民に疫病が起こるようにされました。ダビデは、イスラエルの民が死んでいくのを見て、耐え切れなくなり、どうか災いを思い直してくださいとお願いしたのです。すると主がガドを通して、当時、エブス人のアラウナが畑の収穫物を脱穀する打ち場のところに行きなさい、と命じられたのです。

そこで主のために祭壇を築き、いけにえを捧げます。アラウナは一般の王に対するように、王に対して全てを与えると仰いました。覚えていますか、イスラエルがサムエルに王を求めた時にサムエルは、王というのは民のものをことごとく取っていくのだ、と警告しました。王が自分の娘を取っていくと言ったら、反対する余地はなく、戦争のために息子を徴用すると言ったら行かない選択肢はなく、徴税も文句なしに行ないました。しかしダビデは、そうではありませんでした。「費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません。」と言ったのです。自分が犠牲を払わない神への礼拝なんか、捧げたくないという気持ちを言い表しました。

今朝は、捧げる、または与えるということについて、神から教えられたいと願っています。

1A 頼られない神

1B 仕えられる必要のない方

私たちが、「神に捧げる」という言葉を聞いた時に、決して間違っはいけないのは、神は何か困っている、事欠いているということではない、ということです。神は天地万物を造られた方であり、足りないものや欠けたものは何一つない方です。すべての良いものの源である方であり、与えはするけれども、足りないからそれを満たすために人から取り上げることはないのです。

けれども、まことの神ではない、神々と呼ばれている存在は、そうではありません。使徒パウロがギリシヤのアテネに来た時に、こう説教しました。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かに不自由なこともあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。(使徒 17:24-25)」私たちが神に捧げる、という時に、神が元々自分のものであったのにそれを取り上げるような印象を持つのであれば、それは天地を創造した神ではありません。偶像です。アテネのように、何か不自由なこともあるかのように仕えられなければいけないからです。

2B 支えられる必要のない方

そして、まことの神は支えられる必要もありません。イザヤ書 46 章には、バビロンがペルシヤに倒れて、人々が逃げていく姿を描いているところがあります。「ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの偶像は獣と家畜に載せられ、あなたがたの運ぶものは荷物となり、疲れた獣の重荷となる。彼らは共にかがみ、ひざまずく。彼らは重荷を解くこともできず、彼ら自身もとりことなっていく。わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしがらになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。(イザヤ 46:1-4)」ベルやネボは、バビロンの神々でした。彼らが逃げるときに、その神々を自分で背負っていかねばなりませんでした。重荷となり、自分を疲れさせていったのです。

けれどもイスラエルの神はそうではありません。支えなければいけない神ではなく、私たちを支えてくださる神です。背負わなければいけない神ではなく、むしろ私たちに背負い、運んでくださった神です。私たちは、有名なフットプリント(足跡)という詩を知っていると思います。読んでみま

ある夜、私は夢を見た。

夢の中で、私は神とともに浜辺を歩いていた。

空には、私の人生のさまざまな場面がフラッシュのように映し出される。

そのそれぞれの場面で、私は2人分の足跡が砂浜についているのを見た。

ひとつは私のもの、そしてもうひとつは神のものだった。

私の人生の最後の場面が映し出されたとき、

私はそれまでの人生の足跡を振り返ってみた。

驚いたことに、何度も私の人生の中で足跡が1人分しかない時があることに気がついた。

そして、それは人生でもっとも暗く悲しい時期ばかりだったのだ。

私は神に尋ねた。

<神様、あなたはおっしゃいました。一度私があなたについていくと決めたなら、

あなたはずっといっしょに歩いてくださると。。
しかし、私がもっとも辛い時期に、
砂浜には1人分の足跡しかありませんでした。
なぜ私が最もあなたを必要としているときに、
私からお離れになっていたのか理解できないのです。>

神は答えた。
くいとしい我が子よ。
私はお前がもっとも苦しい試練の最中にいるときにも
決してそばを離れることはなかった。
1人分の足跡しかなかった時期には、
私はお前を抱き上げて歩いていたのだ。>

<http://www.maple-forest.com/footprints.htm>

いつ読んでもすばらしいですね。私たちは、試練の時には特に自分自身で生きています。その時に神の助けはないと感じます。けれどもその反対が真理です。試練の時にこそ、神は私たちの耐えることのできないことを知っておられて、私たちに背負い歩いてくださっているのです。ですから、もし「神に捧げる」という言葉を聞いた時に、「私が捧げなければ神は事欠いてしまう」「私が支えなければ神は立つことができなくなる。」という圧迫を感じているのであれば、それはまことの神からのものではないことを知ってください。その重荷を下ろして、イエス・キリストのところに来てください。主が休ませてくださいます。

2A 主の圧倒的なすばらしさ

ではなぜ、神は私たちに捧げなさいと命じられるのでしょうか？

1B 感謝

それは、私たちが感謝していることの表れとして行ないます。神があまりにも良くしてくださり、お返しすることさえもできずに、ただ感謝していることを、自分自身を捧げることによって表現するのです。先ほど読んだ交読文の詩篇 116 篇には、12 節に「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。」とあります。それで 17 節に、「私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。」と言っているのです。

2B 愛の表れ

そして神に捧げることは、神を愛していることに他なりません。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。(1ヨハネ 4:10)」愛している、というのには、実質的な贈り物があるということです。神は最上の贈り物である、イエス・キリストを私たちに与えられました。ゆえに、その愛を受けた私は、同じように愛をもってこの方に仕えたいと願います。その愛には、必ず贈り物、あるいは

捧げ物が伴うのです。

単なる好きというのと、愛している、ということの違いは何でしょうか？自分がたとえ好まなくても、愛しているのであればそれでも行なう、ということですね。ある夫婦が意気投合して、一つの趣味に没頭しているときに「愛し合っている」という言葉を使うでしょうか？いいえ違いますね、例えば妻が病の床に伏して、それでも献身的に看病しているときに、「この夫婦は真に愛し合っている」という言葉がふさわしいですね。夫は妻に、好むと好まざるに関わらず時間とエネルギーを捧げているのです。捧げるという行為には、真実な愛が滲み出ているのです。

3B 決意

そして捧げることには、決意が含まれます。詩篇 116 篇には、「私は、自分の誓いを主に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。主の聖徒たちの死は主の目に尊い。(詩篇 116:14-15)」主の良くてくださったことについて、感謝のいけにえを捧げ、そして誓いを果たすとこの著者は言っています。そのことに関連して、聖徒たちの死は主の目に尊い、と言っています。これは、「私はここで墓に入るまで、主に誓ったことを果たします。」という決意であります。どんなことが起こっても、私は自分自身を神に捧げるという決意を行ったのです。この決意のところに、私たちは深い神への献身をすることができます。その人の行なう奉仕は、安定し、成熟し、人々に愛を分かち合っていくことができるのです。

3A 捧げる物

1B 砕かれた魂

それでは私たちは具体的に、何をもって神に捧げることができるのでしょうか？初めに私たちが知っておかなければいけないのは、自分自身というものの他に、代用して捧げることはできない、ということです。「たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。(詩篇 51:16-17)」砕かれた、悔いた心です。私たち自身が、聖い神の前に出て行き、砕かれて、へりくだること、これこそが神への尊い捧げ物です。そして、神の御心によって変えられた自分こそが、生きているいけにえであると使徒パウロは言っています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。(ローマ 12:1-2)」

2B 所有物

このように、自分自身の魂を主に捧げする、神の御言葉、神の御心によって変えられるべく自分自身を神に委ねることがあって、それで、自分の持っているものを捧げることになります。

1C 時間

私たちは、自分の持っているものの中で一番身近なのは、「時間」です。私たちが何に自分自身を捧げているかを見ることのできる、ものさしは、何に時間を費やしているかであります。「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。(詩篇 84:10)」主と共にいることの時間を、千日にまさるものとして尊びます。

2C タラント

そして私たちに与えられている能力を捧げます。イエス様が与えられた喩えは、タラントの話です。「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。(マタイ 25:14-17)」そして一タラントをもらったものは、商売をせず、それを地の中に隠しました。

ところで、一タラントは六千デナリのことです。一デナリは、労働者の一日の賃金と言われていいますから一タラントは17年ぐらい、一日も休まずに働いた労賃に匹敵します。相当の額です。それを、それぞれのしもべの能力に応じて主人が託しました。これは何を言っているかと言いますと、私たちにかなり大きな能力が与えられている、ということです。ところが一タラントを受け取った者はそれが些細なものであるとみなしました。神は自分に意地悪をしているとみなしました。それで与えられた能力を用いなかった、ということです。

私たちが、自分勝手に神の下さった能力を過小評価し、「このようなことは些細なことだ。地味だ。このような小さなことしかできないのであれば、私はしなくても良い。」とみなすのです。神にとっては、それは実に大きな財産であられ、それをないがしろにしているという罪を犯しています。

3C 財産

ですから、時間と能力を捧げますが、その他に文字通り、自分の財産を捧げます。これは旧約の時代から主への礼拝において一貫して出てくるテーマです。主は、ご自分が住まれる幕屋を造りなさいと命じられた時に、イスラエル人の持っている金銀からそれを造りなさいと命じられました。私たちが主に対して捧げた金銀によって、主ご自身を礼拝するのです。したがって、私たちが献金をして、その献金によって教会についての事柄の運用に宛がうということは、神の立てられた制度であります。

そして主は、イスラエル人に収穫の十分の一を捧げなさい、と命じられました。そして主の働きに携わっているレビ人はそれを受け取りますが、レビ人もさらに自分の什一をアロン系の祭司に捧げます。そのことによって、主を礼拝するということが、自分自身の財産を捧げることによって行うのだ、ということをも身につけるためなのです。

十分の一を捧げることについて、この教会を始めてから既に何人かの人から質問を受けました。教会の皆さんからではありません、外部からです。「十分の一は旧約の律法に書かれていて、新約時代の私たちには当てはまらない。」そうでしょうか、新約聖書の中にイエス様ご自身が、これをおろそかにしていけないという命令を出しておられます。律法学者とパリサイ人に、こう教えられています。「**忌むしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、他のほうもおろそかにしてはいけません。(マタイ 23:23)**」福音書は、キリストを信じる者たちが集まる所、教会で朗読されました。彼らはこの言葉を聞いて、もちろん什一献金は旧約時代のものだとして理解していなかったはずですが。

4C 言葉

そして言葉があります。「感謝します」というのは、感謝のいけにえであり、「賛美します」というのも賛美のいけにえです。「**ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。(ヘブル 13:15)**」私たちは、この言葉による捧げ物が、これまで話した時間、能力、財産の捧げ物の裏づけがあって、それでその言葉が心からのものであることが分かります。もし、このような行ないがなく口で賛美しているだけならば、それはパリサイ人や律法学者が、イエス様から咎められた言葉と同じ過ちを犯しています。「**この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。(マルコ 7:6)**」

4A 犠牲の必要性

ですから犠牲が必要です。ダビデは、ただでいけにえの祭壇の土地、またいけにえそのものと祭壇に必要なことを取得することができました。けれども、ダビデは自分が費用を払わないで主に捧げたくない、と言いました。

覚えていますか、イエス様が弟子たちと神殿の献金箱のところにおられて、パリサイ人たちが多額の献金を出している中で、貧しいやもめがレプタ二枚を出しました。レプタは一デナリの28分の1という最小単位の銅貨です。けれどもイエス様は、「**この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。(ルカ 21:3-4)**」生活費の全部という犠牲を伴っていたので、イエス様は「**どの人よりもたくさん投げ入れた**」とおっしゃったのです。

1B 愛の本質

犠牲がなければ、それは捧げ物ではありません。自分の余暇に神を礼拝しよう、余裕があれば献金しよう、というものであれば、それは残り物です。マラキ書において、残り物を祭司たちが主に捧げているので、強い叱責を彼らに与えておられます。けれども、なぜ犠牲でしょうか？

これは、私たちの信じている神の愛そのものにあります。「**神は、実に、そのひとり子をお与えに**

なったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ 3:16)」独り子を与えられたのです。これほど大きな犠牲があるでしょうか？けれども、犠牲があるからこそ愛であり、愛は犠牲をともなって捧げるところに表れます。

2B 神との交わり

この神の愛に入るためには、私たち自身が愛さなければいけません。私たちはとかく、神の恵みがあり、その愛は一方的なものであるから、こちら側が何もしなくても、その恵みと変わらないと考えます。確かにそうです。神は私たちが罪人であったときに、キリストを死に渡されたのです。けれども神はこう言われます。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。(1ヨハネ 1:3)」交わるというのは、共有することです。神がこれだけ大きな犠牲をもって愛しておられるのだから、私たちも犠牲を払って愛しているところに、神の愛を知ることができるのです。

私たちが神をそして兄弟を愛しているところに、神の愛が留まります。私たちが人を憐れんでいるときに、神の憐れみが留まります。私たちが人の罪を赦しているところに神が私たちに赦して下さったことの確認を与られます。これは条件付きの救いの話をしていてではありません。救いは無条件、ただイエスを信じる信仰によります。けれども、神を知るには、神と交わるには、神と共有しなければ分かりません。

3B 神の恵み

ですから最後に、マケドニヤにいた兄弟たちの話を読みたいと思います。「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。(2コリント 8:1-4)」恵みと言えば、神から一方的に与えられるものです。けれども、ここでは私たちが与える恵みについて話しています。マケドニヤの兄弟たちは、迫害の中で貧しくされていたのに、それでもエルサレムにいる困窮した兄弟のために、惜しみなく捧げたのです。それによって、「聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたい」と願いました。このような犠牲があるからこそ、神の恵みが互いの間に広がるのです。

もし私たちが、受けることだけを考えて与えるという応答をしなければ、それはパリサイ人や律法学者と同じです。「また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。(マタイ 23:4)」犠牲を払うというのは律法主義的だというのは、実際とは正反対の考えです。犠牲を払わないことのほうが律法主義的なのです。自分が愛の中に生きるとは、猛烈に主にささげていくことに他なりません。その中で神の愛と恵みを知って、他者に分かち合うことができます。